

子どもたちを読書に誘う「手品」

一徹国語人

本を読んだり調べたりするのが本来に楽しい。子どもたちがそう思えるようになるには、先生方の仕掛けが必要です。

図書室で「さあ、好きな本を選んでどんどん読みましょう。」と呼びかけただけで、夢中になって読む子はほとんどいないでしょう。ほとんどの子は、静かに字を追っていく時間を「つらい」と感じるものです。

先生方には、子どもたちを読書に誘うために「手品」のようなことをしてほしいのです。上手な手品師になるためには、とにかく、先生方ご自身が児童書をたくさん読むことです。毎週三冊、年に百五十冊くらい読むと、教室のだれさんにはあの本、だれくんにはこの本と、次々に薦めたくなるはずですから、これは、クラスの全員に向かって手品を見せる段取りを、二つほどご紹介します。五、六年生の秋ごろの例とさせていただきます。

その一 テーマ「みんなで鬼退治をしよう」

まずは、こんな真谷に子どもたちに呼びかけてみてください。みなさんは、鬼を、こわくて自分勝手な心をもつ生き物と

思っていませんか。自分の中に鬼が住んでいるかもしれないなんて思ったことはありませんか。そんな気持ちがあるとしたら、鬼がどれくらい世の中にいるのかを知って、自分の中の鬼を退治してみよう。そして、鬼と友達になって、鬼博士になりましょう。

そして、『ないた赤おに』（浜田広介 作）というお話を持つて来ましたので、だれか読んでください。」と言って、上手に読める子や図書係の子などに読んでもらいます。

次に、子どもが知っている鬼の話にはどのようなものがあるかを聞き、黒板にはった模造紙にその要点を書きます。さらに、鬼はどういうものなのかについて話し合い、そこで出されたことを模造紙にまとめます。

「さあ、ここからが鬼退治の始まりだあ。」と言いつつ、みんなと図書室へ行きます。「おに（鬼）と名のつく本を片っ端からみんなで読んでみよう。」と誘うのです。

本は、教室の子どもの数くらい用意されているのがいいでしょう。参考までに何冊かご紹介します。

1 『いたずらあまんじゃく』 山中恒 文 太田大八 絵

2 『いなくなった小おに』 しみずみちを 作・絵 (偕成社)

3 『おなかのなかにおにがいる』 小沢孝子 作 西村達馬 絵 (ひさかたチャイルド) (岩崎書店)

4 『おにがでた!』 木村裕一 作 田中四郎 絵 (偕成社)

5 『鬼ぞろぞろ』 船崎克彦 文 赤羽末吉 絵 (偕成社)

こうした本をみんなで手分けして読み、それぞれに出てくる鬼の特徴をカードに記入して、模造紙にはり付けると、現代版子ども『鬼世界』ができます。

きっと、鬼が自分たちに近い存在に感じられるようになると思います。「鬼新聞」作りで作文大会にしてもいいですね。自分の心の中に鬼が住んでいたことがなかったかを、子どもたちと考えてみてください。

その二 テーマ「大きくなったら何をしよう」

「日本丸は、風の力を頼りに広い海を百八十三万キロ（約地球四十五周半）も航走した船です。そして、五十四年間に一万一千五百人も商船士官（船乗り）を育て上げた、日本が誇る航海訓練帆船なのです。」

帆船日本丸財団発行の『帆船日本丸』の写真を見せながら、ところどころは文章をとばして先生が説明を加えると、きつとのめり込んでくるでしょう。

この本は解説が難しく、子ども向けの本ではありませんが、船の構造、遠洋航海の様子、訓練生たちの船内生活などが豊富なカラー写真でわかりやすくまとめられています。

黒板に大型の世界地図の掛け図を下げておき、この船が多くの船乗りを育ててきたのだということの説明しつつ、海への興味をかきたてていきたいものです。

海の冒険よりも陸地や地球そのものに興味をもつ子もいるかもしれません。先生が誘う世界は、船乗りを育てることを窓口にするだけで、もつとずっと広くあつてほしいものです。こちらのテーマには、次のような本が薦めものものとしていいでしょう。

1 『クックの航海』 ジアン・パオロ・チェゼラーニ 文

2 『マルコ・ポーロの冒険』 ピエロ・ベントウーラ 絵 (評論社)

3 『海』 ジアン・パオロ・チェゼラーニ 文

4 『地球』 ピエロ・ベントウーラ 絵 (評論社)

5 『みんな ちぎゅうのなかまたち』 加古里子 文・絵 (福音館書店)

3 『海』 加古里子 文・絵 (福音館書店)

4 『地球』 加古里子 文・絵 (福音館書店)

5 『みんな ちぎゅうのなかまたち』 加古里子 文・絵 (福音館書店)

イングリット&ディーター・シューベルト 作 (光村教育図書)

手品師は、子どもたちから上手だと信じられていることが大切です。

天高く、秋深くなるこのごろ。読書にいそしんでみませんか。